

《研究ノート》

プロジェクトアプローチの展開

— ECERS と SSTEW の視点より；木の実幼稚園の実践にみる —

埋橋玲子(現代社会学部現代こども学科)
浜田真理子*(木の実幼稚園**)

はじめに

ECERS(読み：エカーズ)とは Early Childhood Environment Rating Scale の略称であり、アメリカで1980年に初版が出版されて以来、改訂を重ねている保育の質評価スケールのことである¹⁾。SSTEW(読み：スチュー)とは同じく保育の質評価スケールで Sustained Shared Thinking & Emotional Well Being の略称であり、2015年にイギリスで初版が発行されたものである²⁾。

プロジェクトアプローチとは、何かのテーマを共有し協同して遊びを展開する保育の形態をさす。著名なのは造形表現を中心として行われるレジジョエミリア・アプローチであり、ドキュメンテーションと呼ばれる活動記録を特徴とする。木の実幼稚園では造形表現に重きを置き、レジジョエミリア・アプローチにインスパイアされた幼児教育を展開している。

すでに別のところで木の実幼稚園での保育者と子どもの関わりを軸としての、物的環境の整備の重要性、クラス集団活動と自由遊びの関係性について述べた(埋橋・浜田, 2019)。

本稿は、浜田による自園での造形活動についての叙述を材料として(以下、事例の部分)、ECERS および SSTEW の項目・指標に沿い、当該園の保育実践に見られるプロジェクトアプローチを構成する「保育の質」の可視化を試みる。

1. ECERS, SSTEW について

SSTEW は ECERS の形式を踏襲したという経緯があり、両スケールとも構成と評定方法は同じである。ECERS は6つのサブスケールのもとに35の項目があり、SSTEW は5つのサブスケールのもとに14の項目があり(表1)、いずれも各項目は10程度の指標で構成されている。サブスケールは保育を評価するための大きな観点であり、項目はそれを細分化したものである。指標は具体的な観察のチェックポイントであり、各指標に示されたことが観察されたかどうかを「はい・いいえ」で判定し、その結果により所定の手続きを経て1点(=不適切)から7点(=とてもよい)までの7件法により評点を得る。

両スケールは二つの目的で使うことができる。一つは保育の質を数値化するという特質を踏まえての、調査での使用である。もう一つは保育の質を具体的に定義し、観察項目に落とし込

* 木の実幼稚園主任。エカーズアセッサー。

** 大阪府松原市にある学校法人今川学園木の実幼稚園(今川公平園長)。

表1 サブスケール一覧

* SS =サブスケールの略

ECERS 『新・保育環境評価スケール①3歳以上』	SSTEW 『「保育プロセスの質」評価スケール』
SS 1 空間と家具	SS 1 信頼, 自信, 自立の構築
SS 2 養護	SS 2 社会的, 情緒的な安定・安心
SS 3 言葉と文字	SS 3 言葉・コミュニケーションを支え, 広げる
SS 4 活動	SS 4 学びと批判的思考を支える
SS 5 相互関係	SS 5 学び・言葉の発達を評価する
SS 6 保育の構造	

んでいるという特質から、保育の質の見直しと向上を目指しての使用である。本稿は、後者の目的に注目したものである。

2. クラス集団活動「会話」の展開；「展示」の重要性

(1) 会話から記録, 展示へ

「自由遊び」「クラス集団活動」とは子どもの活動の形態であり、保育者が意図をもって整えた物的環境のもとに、保育者と子どもの関わりを軸としてクラス集団活動と自由遊びが展開されることは別のところですでに述べた(埋橋・浜田, 2020)。

浜田はクラス集団活動を「みんなでやるからこそ楽しい活動」と位置付けている(埋橋・浜田, 2020)。その楽しさを深めていくのに、記録と展示は重要な役割を果たしている。事例1では、クラス全員での話し合いの場である「会話の時間」で話題を共有し、伝え合い、わかり合うこと、そして話し合ったことを「記録」・「展示」することで遊びが広がり、深まっていく様子がある。

事例1：会話の記録と展示

木の実幼稚園では、毎日クラス全員の中での「会話の時間」というものがあります。季節や行事の事、友達との関わりの中で起こった事、今日の遊びの中で見つけた面白い事・不思議な事等、子どもたちに関わる色々なテーマを用いてクラス全員で話し合います。保育者から知識を与えるという時間ではなく、子どもたち同士で意見や考えを伝え合い、お互いの思いを知ったり、これから取り組んでみたい事を相談したりする時間として過ごしています。

子どもたちとの「会話」の中から興味が向いている方向を汲みとると、遊びや活動に繋がるきっかけが沢山見えてきます。知っていること、思いついたこと、色んなことを、思いを持って語ってくれたその発言を、文字やイラストで即座にホワイトボード等に保育者が記録するのです。そうすることで、子ども自身も後になって見返せるようになり、継続して子どもとの会話が持てたり、子ども自身が自由にその事を振り返り遊びに活かせたりするようになります。そのホワイトボードの記録は、一定期間そのまま残しておき、子ども達が後になって自分達で思いついた事、知らせたい事を書き加える事が多々あります。

子ども自身が会話の流れを「トピックウェブ」と呼ばれる図にしてまとめることもあります

(写真1)。「会話の時間」に出た色々な提案を保育者がまとめた記録として展示し、同時にその内容を試せる実験の場としてコーナー活動を用意することで(写真2)、さらに遊びが継続されます。そのように、日々生まれる会話の内容を展示・掲示していく事で、様々な遊びが広がられていると思います。

会話を丁寧に記録し展示しておく事で、子ども達にとってだけでなく、保育者自身にとっても、これまでの子どもの姿や遊びの過程、これから子どもたちに聞きたいこと、知ってほしいことが整理されることも実感します。



写真1 興味のあるトピックについて知っている事をホワイトボードに記録する。



写真2 前日に会話した内容の記録と、トピックから生まれたコーナー。

(2) ECERS の観点から

ECERS では、＜SS1 空間と家具＞に【項目5子どもに関係する展示】があり、展示を重要な環境の一つとみなしている。解説書(Cryer,D et al., 2019)によれば、展示物の目的のひとつは子どもの学びの経験を広げることにある(p53)。指標では以下の通りである(抜粋)。

＜最低限＞3.1 クラスの子ども写真など適切な内容の展示があり、不適切な内容の展示がない。

＜よい＞5.1 子どものための多くの展示が保育室全体にある。

5.2 展示のいくつかは子どもの現在の興味に基づくトピックに関連している。

＜とてもよい＞7.1 展示のおよそ半分はクラスの子どもの現在の興味に基づくものであり、子どもが何に興味を持ち、何を話し合っているかが見て取れる。

だが展示物があるだけでは不十分で、保育者が子どもの関心を向けることが必要になる。このことについて同項目の以下の指標が関係する。

＜不適切＞1.1 保育者は展示物について子どもと話さない。

＜最低限＞3.3 保育者は観察時間中に少なくとも1度、展示物について話す。

＜よい＞5.4 保育者は展示物について、自由遊びの間/または決まったやり方で、子どもが興味をもつように最低2度異なる場面で話す。

<とてもよい>7.2 子どもと親しく話すのに展示を活用している。

ECERSの指標は、保育者が展示という環境をどのように作っていくか、そしてその展示に子どもと共に関わることの重要性を示している。いわば行動レベルの指標であるに対し、SSTEWの指標ではその行動のもつ意味を示している。次項でそれについて述べる。

(3) SSTEWの観点から

事例1で示された会話と記録、展示という一連の流れについては、<SS4学びと批判的思考を支える>の【項目9好奇心と問題解決の支援】の指標を参照することでその意義が理解される。

<よい>5.1 新しい素材や教材、活動、もしくは挑戦を定期的に用意している。それらは、その時の保育のテーマ、年間における時期、子どもたちの興味や思考の枠組みに関連したものである。

<とてもよい>7.4 子どもたちの思考のプロセスと問題解決のプロセスを、保育者が言語化し声に出すことで手本を示し、子どもたちのメタ認知を支援している。また、子どもたちが計画し、実行し、活動の評価を行うのを援助している。

これらのことは次の事例にもよく現れている。

事例2：自由遊びの記録を残す

子どもの遊びからは、子どものありのままの姿やストーリーがよく伝わってきます。木の実幼稚園では、「コーナー活動」の内容を写真や図版、文字等で記録し、コーナーごとに展示する工夫を行ってきました(写真3、4)。



写真3 積み木コーナーと遊んだ過程の写真の掲示



写真4 コーナー活動や会話の時間の記録

各コーナーに、それまで遊んだ子どもの姿や作品、また考えを掲示することで、次にここで遊び始めようかという子どもの気づきや新しいアイデアの発見に繋がり、また自分の遊んだ

姿を記録してもらった子どもにとっては、自分の感情や考えを受けとめ、認めてもらえたという気持ちも生まれていることも充分知る事が出来ます。

全体活動でした遊びを自分でやってみたり発展させたりできるようなコーナーを設けることもします。子どもの作品やその遊びの姿を掲示する、そして必ずその傍に、それを見て刺激を受けた時に、やってみられる物と場が設えられた環境があることで、意欲や遊びの広がりが見られました(写真5, 6)。



写真5 クラスで興味のあるトピックをまとめた記録の側に関連コーナーがある。



写真6 全体活動での遊びをコーナー活動で継続できるよう用意。その時の様子を側に掲示。

3. クラス集団活動と自由遊びの往還

前項ではクラス集団活動として行われる「会話」と自由遊びの中でそれぞれに発想された事柄が、記録され展示される経緯を経て子どもの中で連続性を持ち、影響を与え合って遊びの広がりや深まりをもたらしている状況を示した。それはクラス集団活動と自由遊びの往還とも呼べるだろう。その時、保育の場に「言葉」が生まれ、引き出され、見出され、共有されて蓄積されていくのがわかる。

はじめに、木の実幼稚園では造形表現に重きを置き、レジオエミリア・アプローチにインスパイアされた幼児教育を展開していると述べた。その具体的な表れが以下の事例3に示された「プロジェクト保育」である。プロジェクトアプローチを意味するが、それは、何かのきっかけで立ち上ってきたいくつものトピックを、子どもと保育者が協同して大きな流れに統合していきひとつの大きなテーマを描き出すプロセスと言い換えることができよう。そのプロセスで多くの会話や小さな対話が積み重ねられていく。次の事例はプロジェクトアプローチの詳細を記述したものではないが、その一端を垣間見ることができる。

事例3：プロジェクト保育

木の実幼稚園の子ども達との「会話の時間」では、子どもの思いを汲み取り、声を取り上げて、それを中心に保育を組み立てたり、活かしたりしていくことを心掛けており、そういう環境や時間を重ねていくと、各クラスで子どもたちの興味、取り組みたい活動や遊びのテーマが生まれ「プロジェクト保育」が始まっていきます。

興味・関心のあるトピックが様々な形で、コーナー活動の環境や会話の時間にてでくるとなると、テーマに関する話題についての会話も盛んになってきます。ひとつのテーマをどんどん掘り下げて話すことで、頻繁には耳にしない言葉や用語を知ったり、新しい知識と出会うきっかけとしたりします(写真7)。

たとえば、「富士山」に興味を持った年長組のあるクラスでは、その言葉を聞いたことがあっても、改めて考える時間を持ち、それぞれの知識を持ち寄ったり、みんなで調べたりする事でより興味が湧き、「火山→天狗→テングザル→ボルネオ」に至るまで興味や言葉・知識が広がるプロジェクトもありました(写真8)。

子どもの発想や遊びの過程は色々な場面や形で現れるので、「トピックウェブ」や「ドキュメンテーション」を使い、子どもの興味・関心をウェブで示したり、遊びの過程を写真や文字で記録したりして、残すようにしています。

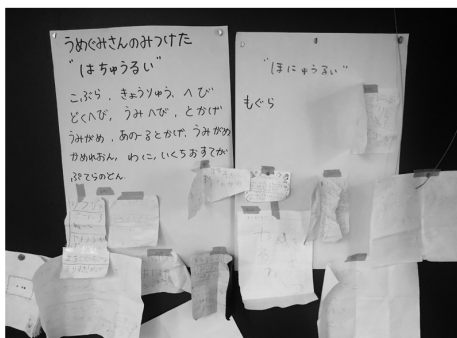


写真7 会話の時間に出たトピックをコーナー活動に用意し、子どもが自由に記述出来る環境を用意。

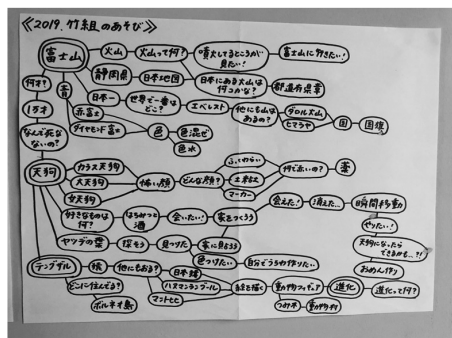


写真8 5歳児クラスの「富士山」をめぐるトピックウェブ。

4. 考 察

すでに別のところで浜田の文章を材料として、幼稚園教育要領に沿い、木の実幼稚園での教育実践と ECERS の項目及び指標と対応させることによって次のことを明らかにした(埋橋・浜田, 2020)。クラス全体での集団活動は、子どもが「環境との関わり方や意味に気づく」きっかけとなるものであり、保育者が「自ら意欲をもって環境と関わる」ことへの導きを行うものである。自由に遊びを選ぶとは、「環境に関わって展開する具体的な活動」が生まれることを意味する。この両方の形態が「適切な環境を構成することなどにより活動が選択・展開されるようにする」ことを可能にする。

本稿では ECERS と SSTEW の視点により、クラス集団活動と自由遊びの往還性について、事例を通して具体的な様相を示した。特徴を異にする二つの保育の質評価スケールの評価指標と保育実践を対照させることで、より具体的に保育の諸場面のもつ意味を明らかにすることができた。

ECERS の指標に沿うとは、“保育の場としてのたたずまい”を正す事であり、ものの揃え方、保育者としての振る舞い方を一定のレベルまで整えていく事である。幼児教育・保育は実に多

くの要素から成り立ち、それらが相互に絡み合っただけで解きほぐす事は容易ではない。だが ECERS の項目、指標より実践を照射する事でどのような要素からそれぞれの実践が成り立っているのかが理解される。

SSTEWE では、“保育の場としてのたたずまい”は一旦成立したものとして、子どもの資質や能力すなわち自己に対する信頼、自己制御、思考のあり方、言葉の発達等を涵養するにはどのように保育内容を計画し、実行し、評価するかに照準が当てられている。

保育の質評価スケールはあくまで道具であり、そのスケールによって示された数値で対象となったクラスの保育を「不適切」であるとか「よい」とかのラベリングを行うものではない。ECERS, SSTEWE という名前の一つの大きなスケールがあるのではなく、それはツールボックスのようなもので、場面々々に応じて小さなスケール(項目と指標)をいくつも当ててみることで、保育を構成する要素の一つひとつを言語化して現状を理解し調整を行なっていく、というイメージが妥当ではないかと思われる。

結 び

本稿では ECERS 及び SSTEWE の項目及び指標と、木の実幼稚園における保育の諸場面を参照した。それにより、クラス集団活動と自由遊びは決して別物ではなく、展示という仕掛け、モノの配置のしかた、保育者の一人ひとりの子どもに注ぐ眼差しや関わりと共に、園での子どもの生活を形作る連続した2つの構成体であることがわかった。プロジェクトアプローチはどのように構成された保育の産物である。

注

- 1) Harms,T.et al. 2013 *Early Childhood Environment Rating Scale-3rd ed.* (埋橋玲子訳2015『新・保育環境評価スケール①3歳以上』法律文化社)
- 2) Siraj,I. et al. 2015 *Assessing Quality in Early Childhood Education and Care : Sustained Shares Thinking and Emotional Well-Being (SSTEWE) Scales for 2-5 years-olds provision* (秋田喜代美他訳『「保育プロセスの質」評価スケール』明石書店)

引用文献

- Cryer,D., Riley,L. & Link,D 2019 *All about the ECERS-3* Kaplan
- 埋橋玲子・浜田真理子(2019)環境を通して行う幼児教育・指導計画(短期)に注目して～木の実幼稚園の教育実践／～『保育環境評価スケール(ECERS-3)』の観点からの考察～ 同志社女子大学教職課程年報 pp. 78-88
- 埋橋玲子・浜田真理子(2020)ECERS と SSTEWE の視点による保育の質の検討 同志社女子大学学術研究年報 Vol. 71. pp. 119-122